

第36回 ふとまにの住処ミーティング&TV

日時：2021年7月8日（木）19：00～

講師：石原政樹・木下拓也・七澤喜和・竹内健

石原さん→石

木下社長→木

喜和さん→喜

木「みなさんこんばんは。ふとまにの住処のお時間となってまいりました。今日は各地で災害が多発しております、熱海と島根と鳥取ですかね、被災された方々がたくさんおられるんですが、冒頭にその被災された皆さま、ご家族が被災された皆さまにむけて鎮魂をさせていただきますと思います」

喜「今日は冒頭から鎮魂ですね」

木「鎮魂といえばこの方に登場していただきましょう。拍手でお迎えください」

石「皆さんこんばんは、ご無沙汰しております。さっそく、今お話にありました鎮魂から入りたいと思います。一礼して開始いたします」

鎮魂

石「それでは一礼して終了いたします。ありがとうございました」

木「今日は先月お休みされた石原さんが久々におられるんですが、近況など」

石「近況報告ということで、ここのところ私の身内でごたごたしております、石原本家が元々棚田の美しい岡山の方にあるんですが、95歳の叔母が独りで守ってくれているんですが、年齢的なものですか、限界集落に近づいているようなところですね、心身ともに大変なところもありまして、そちらのケアでありますとか。叔母だけでなく一族、いろいろ嘖き出しているところもありまして。身内の話で恐縮ですが、あまりこう、私もそうですが子どもがいないとか、独身、転勤族で全国散らばっていたり。一族で地域で助け合えるようなフォーメーションもなかなかないということで。現代社会の縮図だなと感じながら、アシストできるところはアシストしているというところでもあります。特に地方で思うのは、地域のインフラが崩壊しつつあるっていうところで、美しい棚田百選に選ばれるようなところがうちの本家なんです、そこもだんだん荒廃して跡継ぎいないということがあったりですか、地域の神社ですね。父や祖父が大事にしていた地域の神社を鎮魂の意識をもって参拝してまわってるんですが、その社殿も行く度に荒廃していくというところもあったり、あらため

て我々の、農業的なこともやりますし、神拝作法ということで、本来それは人が勝手に作り上げたものというよりは、おそらく日本人は天地のメッセージを受け取る能力がもともとあって、それを受け取るための作法として白川の神拝作法はあるとおもうんですね。今そのことに気付けた我々が各地域やIさんみたいに海外で鎮魂やったださってる方もいらっしゃるの、そういうことを改めてきちんとやらなければというところを自分の一族を通して、痛感しているというところがございます」

木「岡山の北の方ですか」

石「そうですね。改めて思うのは、今日4回目の緊急事態宣言出ましたけど、情報による恐怖、インフォデミックという言い方もしますけども、テレビも執拗に流すなっていうところで皆影響を受けちゃって」

喜「不安の上に不安を流す。心を責められる気がしますよね。追い打ちをかけられている。その中から更に、つらいことを思うんじゃなくて希望を見出していく方法を私たちは見つけていきたい」

石「もともと長い目で見ますと人類はウィルスで進化したっていう、ミッシングリンクとか、ポーンと飛んでる瞬間にそういう存在があったという話もありますけども。大祓的に言いますと、どん底に落ちて、「下津磐根（したついわね）」で地獄に落ちて「宮柱太敷立（みやはしらふとしくたて）」そういうところが起こる訳で、そういうことが出来る情報場を持っているのは我々データムグループであると改めて感じて、この時代だからこそ、ここに集っている皆さんとしっかりと、実際時空が越えられちゃってるわけですからね、テクノロジーと意識の力で。まだまだ少数ですけど、これからこういう輪を一緒に広げていきたいなというところを感じるところです」

喜「不安な情報の中で自分一人で思い悩むのではなく、一緒に悩んでいく人が共にいるんだということを、私も皆さんの顔を拝見するだけで元気が出てくるので、逆に皆さんの方も感じ取っていただけると嬉しいなと思います」

木「顔を出していただけるといいかなと。可能な方で結構なので」

喜「お久しぶりで、石原さんは五月が無かったので3か月ぶりで、そうなると、お会いできたのが偶然ではなくて必然で集まっているんだということに感動すら覚えているんですが。会えなかったことがとてもつらかったです。皆さんに会えないことが何回かあったので、今こうやって元気なお姿が拝見できて、皆さん元気で良かったです。悲しい気持ちにもよりそって、楽しい気持ちにもよりそって そういう場所でありたいと。いま改めて皆さんの顔を見て思いました。石原さん本当にお久しぶりでありがとうございます」

石「まあ、そんな事情もありまして、今回もう一つ思ったのは、そういう独り暮らしとか、特に地方で、先祖代々のお墓をどうするかという問題がすごくあって。墓じまいみたいなね。結局、お寺さんとか石屋さんとかのエゴでつぶしちゃうってところもあったりして、改めてお墓参りもさせていただくと、何代も受け継いでくれた人たちと対峙するようなところもあって、ここ数年数十年で会えなくなった人、それまで会えてた人っていうのがたくさん

いるわけですが、鎮魂というのは、生きていく上での悲しみをまきこみながら、でも鎮魂の中で再会できる、今回短い時間ですけども鎮魂させていただいて、顔は解らないけれども亡くなった熱海の方々の悲しい思いとか、大変な思いをしている人の悲しみとか、荒れ果てていく地域とか、鎮魂して一つになっていくというですね。それをリアルに中今で体験できる場所も、我々だから出来る世界でありまして、こういう時期に祓い鎮魂言霊という価値感を共通言語として持っている私たちというのは本当に幸せだなということも、感じますよね」

木「今回石原さんも前の名称の終の住処的な話の中でリアルに体感されていると思うんですが、今日改めてふとまにの住処に名称が五月から変わりました、今まで簡単にしか説明されていなかった部分をじっくり振り返りながら皆さんに共有させていただいて、これから皆さんとどう進んでいくかということをお話する時間にしていきたいなと思ってますので」

喜「皆さんと共に生きていく場になると思うので。皆さんの、それよりこれもやりたいという話もこの後でお聞きしたいです」

木「そうですね、相互交流ということで。今日は振り返りも含めて、終の住処の時代からいきましょうかね」

石「ここに至るまでの経緯ということで、改めてお話ししたいなと。以前から携わっている方は改めて再確認ということで、お付き合い頂きたいと思います」



自然素材服	ロゴファーム	有機食材	神社鎮魂	戦地鎮魂	寺社鎮魂	ファスティング	鍼灸	気功
親和性	衣食住	無農薬	奉告祭	言霊的国防	言霊	呼吸	健康	ヨガ
判断力	認知症	シェアハウス	祓い	勤行	ロゴストロン発信	腸内環境	気功	食養
青少年育成	介護問題	犯罪減少	衣食住	言霊的国防	健康	穀類	ワイナリー	
老後	セーフティネット	貧困児童	セーフティネット	終の住処	農業	畜産	農業	麦
過疎	住居問題	失業	芸術	構成メンバー	コンセプト	葉物	酒	りんご
演劇	絵画	鎮魂歌	老夫婦	若夫婦	高齢独	縄文	イソノミヤ	芸術家村
文芸	芸術	舞踊	児童	構成メンバー	シングルマザー	工房	コンセプト	和風
美術	彫刻	音楽	独身	事業家	シングルファーザー	ラボ	工人	修道院

(スライドを見ながら説明)

石「もともと終の住処構想がはっきりした形で出たのは2018年あたりかと思うんですが、七沢研究所時代から、様々な鎮魂や神事を通してこういう構想はあったわけで、或いはゼオライトとかあいうものを通して、時代の混迷を乗り越えていくような研究開発ベースのところが、もうすこし具体的にしよう、というのが終の住処構想。当時全国的に少子高齢化とかいろんなことがマスコミに取り上げられていた時期でもあって、我々いろんな政治的なネットワークも持ってますので、ある地域の議員さんからも自分の地域でそういうことを進めたい、終の住処構想というまさにそういうような話もあったんですが、なかなかどう進めていかかわからないということがありまして、その人の提案書を替わりにつくるというようなところでこのスライドが出来ているというのがあります」

【終の住処とは】

生涯に亘り、
人々の生活の根本である
衣・食・住を保証し、
心身両面において
社会のセーフティネットになる
ものを指す。



プロジェクトの目的

- 生涯に亘る終の住処構想の実現
- 社会貢献事業の拡大
- 社会問題の解決
- 言霊的国防の確立



背景にある社会問題

- 少子高齢化
- 老老介護
- 核家族化
- 養育困難な状況
- 地域コミュニティーの希薄化
- 貧困児童の増加



木「イソノミヤヴィレッジっていうのはあれですかね、イソノミヤ社会っていう」

石「イソノミヤヴィレッジっていうのは、伊勢神宮の古い名称でもありますし、古代ギリシャのイソノミアという支配のない社会、お互い助け合う社会が昔あった。そういうところがベースとしてあったんですね。で、終の住処といった時に、中央にですね、生涯にわたって自分の衣食住の心配がない世界、それから、健康、農業、それを支えるコンセプトとか、構成メンバーとか、あるいは国境を越えて、特にこういうのって気を付けないと主義の押し付けになっちゃうので、それを超えていくには、言葉を超えた感動ということで芸術ですね。あと、我々らしい言霊的国防というのがあるわけですね。で、まあ終の住処とは、という一般にもわかりやすい、議会、議員さんでも訴求しやすい内容として、将来にわたり人々の生活の根本である衣食住を保証し、心身両面において社会のセーフティーネットとなるものを目指す。プロジェクトとして、今申し上げたことに加えて、イヤシロチ化事業とか、社会貢献事業の拡大、それによる社会問題の解決、更にコアなところで、言霊的国防の確立というようなどころがあります。背景にある社会問題として、少子高齢化。これを立ち上げたとき皆さんからお声をいただいて、地域で自分自身が60こえて70近くて90代の父母を診ていてというようなどころがあって、そういう家なんかも使ってもらえないかっていうような話があったりとか、いろんな地域コミュニティ希薄化とか、貧困児童の増加っていうところがいろいろあったんですね。今もありますけれどね。で、デジタルっていうところがどうしても、言霊的国防っていうのが絡んできます。伝統的な白川によるご神事と、デジタルの発信ですよね。それによって地域に柱を立てるというところがあって。さつき喜和さんも打ち合わせで仰ってましたが、各地域がツボだった、神社がね」



デジタルに御柱をたてる 圏之御柱プロジェクト

国之御柱
プロジェクト
全国一宮

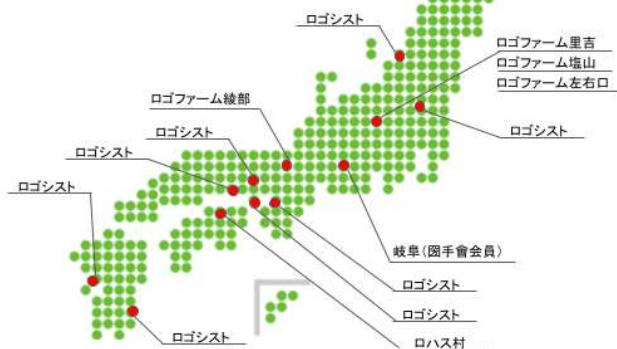
7

喜「神社が体でいうとツボにあたる場所を守っている、そういう風に認識していますので、その神社さん一つ一つが私達を、日本全体を守ってくれているっていう思いだったので、今の状況を少しずつ前向きに変えていきたいという、デジタルとアナログの両面からということですね」

石「日本自体が、龍体というのか、その中でも龍脈といいますか、流れみたいなのがあって、その中の、重要なツボが一宮だったり、二宮三宮だったりということがありましたので、そこが荒廃しているということを改めてきちんと整えていくようなことがあって発足したとうことがあります。こんな感じで改めて、コロナでなかなか甲府に集まっただけないというところで、必要な概念じゃないかなと思うんですけど。ここからもっと生活ベ-

スになります。一つ前は全国の一宮を発信とご神事で整えていく。当時囲手會に参加して頂いていた方は鎮魂ツアーという形で全国の神社を周って、そこで神事を行うということをやってきましたですね。

終の住処構想 ご賛同の皆様と共に、 全国にアナログの 御柱をたててまいります



全国各地で、高品質な食物のネットワーク化が実現



これはもうちょっと生活ベースで、終の住処構想に参加できる方はこういう食物ネットワークですとか、アナログで柱をたてていく。当時はロゴファームという、木下さんが中心にやってきましたけど。ロゴファームという形で実験農場的にやっていたとうことがありました。参加されている方々、食っていうところで、農薬とかの心配のない、体に良いもの、循環しあえるような、そういうものを創れたらいいねというお話をしていました。

各地で育まれた四季折々の新鮮な作物を、
神前に捧げます。

神拝作法（七種、六種）伝授される門人が増えていく



10



昔から神と農という考えはあったんですね。ハレとケという概念が日本人にはあって、昔の農業は辛かった訳ですから、体の第五階層の辛さをのりこえさせてくれるのが第一階層、意志、神という、意志エネルギーだったので、日々の肉体を動かしてやる農業もそういうところまでちゃんと昇華していく。民間でもお神楽をやったりとか、御神楽の歌を歌ったりとか早乙女がね楽しくやったりそういうことも含めた復興ということでありました。

終の住処プロジェクトの社会事業的視点

限界集落の再生

- ・古民家再生
- ・自宅のシェアハウス
- ・大手企業との提携
- ・後継のいない家付き農地をリーズナブルな値段で購入し、再生後に社会的投資家を誘致



限界集落の再生というのもあって、関わってくださってる人の中でも古民家の再生とか実際やってくださってる方もいて、各地で少しずつですが芽が出てるのかなという感じですが、ここに書いてある内容はものすごく大きなテーマなので、当時皆さんに申し上げたのは、発足した当時は更にメンバー少なかったもので、我々だけでは無理ですとはっきり申し上げまして、参加されている皆さんと一緒にやっていきたい、ということをお願いしました。里山資本の活用というところで、木下さんが詳しいですが、今見捨てられているもの、山林とか。いろんなものが現状つぶれていっている。一部ではそういうのを復興しようというものあって」

終の住処プロジェクトの社会事業的視点

里山資本の活用

- 里山資本の原材料、加工
- イヤシロチ化から世界鎮魂化の推進
- 世界中の人を誘致→六次産業化
- シェアハウスを活用した企業研修の実施
- 地方自治体研修の実施(地方の問題を解決)
- 国の補助金の活用
- ログファームの活用

【事例】北杜市の内閣公認NPOえがおつなげて
「里山資本主義」
三菱地所など大手企業との提携、限界集落を再生



プロジェクトの目指す未来

- 生涯にわたり衣食住の心配がない
- 孤独死の心配がない
- 生産性を問われない事業体
- 歳とって、子供が出来て、というときに
- 介護シェアリング(家族が一人で見ると介護の限界)
- シェアリング農業による食糧の自給化
- 余剰作物を加工して事業化、価値化
- 人件費のかからないコミュニティ
- お金でなく、生きがいを求めてやってくる人
- その事業収益を他のことに活用できるようになる
- 公共で使える言霊の図書館を作ろう
- デジタル図書館の創設
- 鎮魂道場の建立
- それが実現可能な工務店出身者による建設
- 年配になっても不自由なく助け合う
- 若くて子供がいるうちは周りが面倒を見合う
- 老若男女問わずのコミュニティー
- プライバシーは適度に保たれる
- テーマ別シェアハウスの展開音楽・研究など



13

木「最近ちょっと下がってきましたがちょっと前まで木材の価格がものすごいあがって、そういう時に国産が使えないかという事だったんですが、なかなか間伐が進まない中で木材を麓までおろしてくるのが大変なんですね。私が以前関わっていたところでそういう取り組みをやっていたところもありますね」

喜「林業っていうのは比較的忘れ去られてしまった産業になるんですけど、林業があつてこそ守られている循環というところもあるので、これからはどうしてそれが必要かっていう事からお話を皆さんで深めていきたい」

石「皆さんさっき申し上げたように実際実践して下さっているSさんとか岐阜にお住まいで、ヒノキを生かさなきゃということで、個人で地場復興のためにセミナーハウスを創りあげた方も実際にいらっしゃる」

喜「水も綺麗になりますし、土砂崩れを防ぎますし、林業っていうのはものすごい生活の基盤になっていると思うんですね。なおかつ花粉の問題とか含めて、今林業人口が減ってしまったために二次災害三次災害が起きているので、直接関係ないことではないということも、もう少しお話を、これ以降していきたいとは思っています」

石「もう少し細かくしていった内容ですが、言霊図書館を創ろうとか、実現しましたね。あの頃まだボロボロの銀行でしたが」

木「生まれ変わりましたね」

喜「この2年くらいの中にコロナの問題で皆さんと実際にお会いすることが減っていて、お会い出来ない出来ない内容とかもありますので、それはこれから希望をもって未来に繋げていきたい内容ですよ」

木「この間も6/30に大祓祭祀がありました。会場で行われた方からお話を聞いたところ、オンラインも体感があっていいのですが、リアルでの雰囲気や一体感はオンラインと違うというお声もいただいたので」

喜「実際に会うと違うという」

木「そうですね、これからそういうところも大事にしていきたいと」



石「次ですが、神と農の融合といおうことで。皆さんコアメンバーに関しては、白川が言っている神を食らうという世界をリアルに体感できるっていうことを実現したい。当時祝殿講習とか祝殿に来ていただいている皆さんのお声を聞いていると、今のコロナもそうですが、一般社会に流れている情報とここが掴んでいる情報が違うんですね。祓いやご修行を始めたばかりの人が祓いを一日数十分する、あるいは1~2か月に一回ここにきてご修行する。ただ一般社会に戻るとなかなか巻き込まれて祓いの体感が得られない、どうしたらよいかという質問があった。であれば、極力そういう人たちがインターネットもあるが集まる人は集まれる、将来的には住みたいところがあればそこに住めるような、そういうところで、甲府はややそういう動きになってきてるんですが、スタッフが勤務のために通うだけじゃなくて、住んで、朝にご修行してそれから仕事にはいるという。それを極力密着してやることで、神を掴むということもありました。一般の方に関しては、議員さんが一般社会でやるというところでは、本来神道っていうのは社会的に普通に浸透していたんですね。そこでつらい農作業を超えるために、神社でお祀りをやったり神楽歌を歌いながら稲を植えたりとか」

喜「直会もそうですね。皆でこの時間を共有しよう、楽しみを分かち合うというか」



祭祀の後は、
献饌したお供え物を
直会（なおらい）で
参列者が一堂に会し
いただきます。

21

石「当時考えていたのが、全国の皆さんから、農で頑張った方から中央に献撰しても面白いんじゃないかとか、各地でロゴファームも試験的に展開していたので、そこでご神事をやって、何人か女性が早乙女隊になって農作業したりっていう、甲府や岐阜の方でもやったりしましたが、それが結局は日本の伝統文化を守ることになる。文化を継承する」



22

喜「良い文化を残していきたいという思いが強いですからね」

木「やはり、地方の創生というか、活性化している方がいらっちゃって、その方はいろんな農村のいろんな成功をどんどん進めてきた、石原さんと一緒に話を聞きに行きましたが、

自分はそこに行けばどうやって活性化するかわかるけど、文化をこれからやっていきたい、それが残ってないという話をされていて、それで興味を持たれてますよね、当時」

石「これは一般的な話のようで、コアなここにあつまっている皆さんのように、言霊的国防ということに携わっているところもあって、国家のそういうのにかかわる方々が入り出している中で、特殊部隊とかインテリジェンスにも優れた方が世界中を回って、各国の武官と接して確信するのは、伝統のある国は軍隊も強いということ。伝統のない国はそれなりといたしますか、目の前の勝負で大局を見誤る。もう一つ言われるのは、神話のある国は強い。ある面そういうことを西洋の列強も知っていたので、植民地政策の時大英帝国とかは宣教師とかを派遣して、宗派を変えてしまうとか、その神器を奪って大英博物館に放り込むとか、神話をつぶしていく、神を奪っていくということをやります。大きな目で見ると日本の国体に関わること、そこを、こういった素朴なことを通してきちんとやっていく。そこを趣旨として発足したというところもありました」



木「その流れを変えたわけでもなんでもなくて、ふとまにの住処、なぜ名称が変わったのかというところで、これまでの流れはどうなるのかって皆さんまだ知らない方もいると思います」

喜「構想的にも今までの流れを汲んでいて変わっていないんですね。ふとまにの住処になった時に、ふとまにの里を中心に発信している内容を今お知らせして、今もふとまにの里の前で中継をしまして、終の住処という今ちょっと閉塞感のあるなかで、終わりになっていくことを憂いているわけではありませんよっていう意味でもあって、ふとまにの里から生まれてくるものをみんなで見分ち合い、これからどうやって社会を私たちの手で変えていけるのか、守っていけるのか、そういうことを一緒に発信しましょう、共有しましょうということで、名前が変わったんですね。今いるのがふとまにの里、だからふとまにの住処が良いんじゃないか。コロナの閉塞感もあって「終」という文字を繰り返すのは気持ち的に塞ぎこむ人もいないんじゃないか、明るいテーマに出来れば良いなということで、タイトルだけふ

とまにの住処ということに変更しました。今までやってきたことはなくなってしまったんじゃないかとかそういうご心配もかけてしまったということで、今回改めて石原さんも一緒に、皆さんのご意見も聞きながら、これからもよろしくお願ひしますということでお話をしています」

木「放送曜日も水曜から木曜に変わっていて、出られなくなったかたもいらっしゃいますので、その辺は木曜日になりましたということで。今まほらエステートということで地場産品の開発とか、地域の観光資源、後ほど動画で出させていただきますが、さびれた神社が山梨にもたくさんあり、石原さんが毎週通ってる岡山にも、皆さんのところにもあると思うんですが、私たちがある種の一つのロールモデルとなって、こういう形で復興していきますよというところを皆さんに共有しながら、皆さんの地域でやっていく、そういう流れができていくと、日本全体が、それぞれを守る役割、御柱、アナログの御柱という話がありましたが、ふとまにの住処を皆さんとやっていく一つの目的なのかなと」

喜「別々の空間に生きているけれど、同じ心を持っている。同じような活動をしている。こんな活動を始めましたよっていう声があれば、もっとこんなやり方がありますよっていうより良い地域活性化とかより良い御柱を立てていくという事をやっていくと、どこもかしこも日本中強くなりえるということで、そういった活動、一緒に集まれないからこそ、そういった提案も出来たら良いなと」

石「改めて、ふとまにの里のふとまにという意味をかみしめることも必要かなと。布斗麻邇、布留部、鎮霊ということがあるように、全ての創造の源っていう意味があって、そこにいくっていうことは、終の住処という名前を付けたのは、議員さんが地域で立ち上げたことへのサポートもあったんですが、当時はライフチェンジというセミナーがあって、死というのが一つのテーマだったんです。死と再生、来世、今の自分を創っている前世、三世を支えるものは何かというなかで終の住処という名前が出たわけなんです。本来生も死もない、神道的な生き通しという、言い方を変えれば中今という世界。我々は年をとって死んでいるように見えるけれど、布斗麻邇の世界は階層が変わると時間を超えている世界であって、絶えず創造が繰り返されている世界なわけですし、名前を今回冠したということは、改めて生と死を超えたところで、でも日々の生活をよくしていく具体的なものがどんどんできていくところが、オンラインギフトボックスとか、そういう生(なま)のものを通して中今を掴むというのがこれからの新しいスタンスになっていくんだろうなということを感じています」

木「今はどうしても、8/22までは緊急事態宣言ということになりましたが、宣言が空けましたら私たちの方に来ていただくという機会を増やして行って、そこで体験して頂いて、なかなかオンラインだけじゃ解らないと思うので、例えば1週間とか一緒に滞在して頂いて、一緒にやったりとか、そういうことも社会情勢次第では出来るかと」

石「両サイドで交流できるというのもこの番組の良い所ですが、またリアルで。なかなかこのご時世になると、本来大事にしていた双方向性がなかなか難しいところもありますが、番組で補いつつまたリアルでっていうところも」

喜「実際会えた時の、あの時の話、みたいな盛り上がりを楽しみですよ。会えない時に、今画面を通してお話したことを、実際に会ってあの時こんな話しましたよねみたいな同窓会じゃないんですけど、わいわい出来たらということ、今からわくわくしています」

石「意識で繋がるということが祓い鎮魂言霊でできるっていうことと、このズームとか繋げることで、あんまり久しぶりな感じがしない。今回も豪雨で、心配な方はメッセージを送ったんですが、即、無事ですよっていう答えをいただいたりして、こういうのはテクノロジーのありがたさだなと。でもどっちに使うかということが問われている、悪用することもいくらでもできる。コロナの不安はテクノロジーの悪用というか」

喜「安否確認ができてありがたいけど逆に不安を煽ることもできますからね」

木「そういった中で私たちも活動してきた一か月なんですけど、先日、山梨の神話知とか、日本武尊がきた足跡を辿るとか、いろんなテーマをもって、石原さん喜和さんを中心にいろいろ視察してまして、その動画をちょっとみていただきたいなと」

動画ダイジェスト

・酒折宮の紹介 日本武尊が最初に歌を詠んだところ 酒折連歌が有名 古事記にも唯一山梨で登場している

・浅間神社の紹介 一宮 せんげんというのは、何かを宣言する（ふとまにの意志の発動）という謂れもある 大祓祭祀の予祝をさせていただいた 斎田にて今年の豊作をお祈りさせていただいた

・御氣石神社の紹介 祀神が天之御中主（山梨は四つくらいしかない珍しい場所） 日本武尊がこちらでお休みになって靴ひもを結びなおしたという所以がある、後世、武田信玄のお父さんが足がつった時にここで休んだらよくなったので、いわれを長老に聞くと日本武尊のご神体があります、ということだった

・武田神社の紹介 山梨ではおそらく一番有名

・ふとまにの里の田んぼの紹介

木「その土地の神話や歴史を知ることは自分を知ることに繋がりますし、こういったことはすごく大事なことですよね」

石「西洋でもルーツを思い出すということで子どもの情緒が安定したり能力がアップしたりということが注目されていて、NHKでもやっているような、ファミリーヒストリーを知ろうみたいなこともあるんですが、日本人ってもっと根本的な、遠津御祖神的な、人と神が統合されていく世界、それをきちんとお伝えしていく。神社神道の方もたまに来られますがやは

り既存の神学ではそういうことを教えてくれない。神も霊も語らない。そこは我々の役目になっていくでしょうね」

木「荒れ果てた神社は大黒柱や迦具土で、無許可では出来ないなので、宮司さんや氏子さんを探し出してやっていく活動をスタートさせたいと思ってますので、皆さんの地域でもそういう神社がありましたら一度ご相談いただけるとありがたいです」

喜「これから先もあちこちの神社さんを周っていきたいなって言ってるんで。これふとまにの里の御田植が終わった後ですね」

石「みんなでやるのは、神っていうのを頭においてやる農業っていうのは本当に楽しいなっていう感じがしますね」

喜「大変なことも一緒にやることで喜びに変わっていくと思います」

木「農作業って一般的には大変で暗いイメージ」

石「重労働っていうか」

木「神事と繋がることで意味合いが全然変わるというか。最後お土産が出てきましたが、これも全部ふとまにの里で採れたものを中心として出来ていると」

喜「お米とか、真菰茶」

木「その土地で採れたものをその土地で食べるという醍醐味。今後も皆さんと分かち合っていきたいなど。今後もそういった神社だけでなく、山梨は古墳がたくさんありまして、縄文前期の遺跡も点在してるんですね。加えてここは、3つのプレートの中心点でもありまして、それが織りなす地形、温泉もあります、プレートがぶつかり合って出来た中での右旋と左旋のエネルギーのなかで、水晶ができたり、金脈とかですね、いっぱいありますし、皆さんの地域もそういった特徴がそれぞれあると思いますので、私たちはそれをこの中で紹介していくという事になると思います」

喜「チャイルドアーツで宝探しって行って、ふとまにの里を掘り起こすと水晶が出てくるっていう。わー行って喜んでくれるんですけど、水晶がいっぱいあると畑は可哀想なんだよ、じゃあみんな、宝探しで探して掘り出そうか、なんて。宝探しなんですけど、それが場所を綺麗にしているってことに繋がったりとか、楽しみながら農作業に従事していくってことを子どもたちを含めてやっていきたいと思います」

木「今月も管理人の竹内さんから最近のふとまにの里の状況もシェアしたいと思います」

竹「こんばんは。私からはふとまにの里について写真を使って最近の様子をシェアしたいと思います」

(スライドの共有)

ふとまにの里の案内

- ・6/5御田植祭

イセヒカリという品種とキヌハナモチというもち米を植えた様子

- ・7/3七夕願立祭

チャイルドアーツアカデミーで4月に種まきした人参を収穫

子どもたちに短冊に願い事、というより意志の宣言を書いて頂いて祭祀で献撰したものを笹に短冊に着け、斉藤祝殿宮司とともに六種鎮魂作法を行った

- ・ふとまにの里の植物や鳥の紹介

- ・ジャガイモ、ズッキーニなどの収穫の様子

- ・今後新しい野菜を植えて畑も充実させていきたい

- ・シャインマスカットも順調、8月中旬に皆さんと一緒に収穫できたら

竹「チャイルドアーツ、最近少子化で一人っ子が多いんですね。他の子ども達と学校以外で触れ合うという事がなかなかないと思うんですけど、こういう場で触れ合って、一人っ子のお姉ちゃんが小さい子の面倒をみるなんてシーンもあったりして、協調性が養われる場になってるかなと思います」

喜「幼馴染みたいなのが出来ていいですね」

竹「第二の故郷みたいなところですね」

石「終の住処始まった時、血縁を超えたファミリーってところがテーマとしてあったんですが、ぴったりですね」

喜「こういう小さい頃の思い出というのが将来にわたって心を支えてくれるっていうもとにもなると思うので、良いですね」

竹「何十年後かにふとまにの里で同窓会をやるっていうのも面白いですね」

スライド終了

木「これから皆さんと相互交流の時間を。石原さんから是非ご指名を」

石「さっきお話をさせていただいたSさん、最近いかがですか、地場復興ということで」

Sさん「お久しぶりです。こちらは息子の田んぼが増えておりまして、だんだん田んぼが出来なくなっている年齢的な問題があり、山里が崩壊していくのを息子も懸念してまして、自分がやっていることの姿をみていただいて、周りの方たちが奮起をしていただけるような将来がくるといいなという思いでやっているというか。そんなことで増えて大変になっているですけども」

喜「そういうことも深刻な問題ですね」

石「今どれくらいの広さなんですか」

Sさん「今は六反。はじめは一反からはじめたんですが、六反に田んぼが増えまして、二反くらいの畑も増えて、息子一人でやっているので大変です」

木「若い人はいらっしゃらないんですか」

Sさん「今四年目になるんですが、名古屋の方からご家族が参加していただいて、皆で田んぼをにぎやかにしようということでプロジェクトをはじめまして、皆さんのおかげで運営ができているというかそんなところですよ」

木「一つのコミュニティが出来ている」

石「元々、これからどんな時代がきてもそれを乗り越えられるようなコミュニティのために行動起こさなければならないとSさんが10年くらい前に仰って、今はおひとり(?)に大庵ってのを創られて、いろんな方のよりどころになってらっしゃる。行動がすごいですよね」

Sさん「農業の出口として、お野菜を売るだけでは心もとないものですから、厨房を立てまして、息子が作ったお米屋とかお野菜とかを使ってお弁当を作ってるんですよ。ここから皆さんに農業の形を見ていただくきっかけになるといいなと思ひまして、出口であり入口であるということですよ」

喜「親子で信頼し合って一緒にお仕事をしてモデルケースを創っていくと、どなたもそうやって仲良く、子々孫々を繋いでいきたいと思っているので、ある意味羨ましいですね。そういうことが出来るってことが、素敵なことだと、本当の意味でお手本になっていると思ひます」

木「場所もイヤシロチ化をかなりしていただいて、ゼオライトを壁にも塗られたりとか」

Sさん「いろいろお知恵を拝借しまして、お陰さまでここに来る方たちが全然疲れない、集中力が続くということをいろんな職人さんが言って下さるんですけども。そういう見えな力というのも皆さんの言葉から感じさせていただいているというようなことで、すごく感謝しております」

石「Sさん自身がお母さんを看取られて、介護と農作業で1〜2時間くらいしか寝てない状況でずっと動いていて、それでも動けちゃうっていうところが」

喜「原動力があるんですね。今度お弁当みせてもらいたいです」

Sさん「今度写真送ります。またよろしくお願いします」

喜「ありがとうございます」

石「Yさんいかがですか、近頃のご活躍など」

Yさん「仲間と以前から和の成功法則とかお清めCDとかをかけてくれている仲間たちと一緒に30坪くらいの菜園をやったりとか、私が嫁いだ先で菜園をやっていたところだったんですが、納屋に忘れてた井戸があったのを思い出して、今度復活することになったので、ちょっとずついろんなことを整えながら皆で頑張ってます。楽しみながらというのが必要なので、私自身が、祓い鎮魂というのが私の暮らしとか生き方の中に入れてくれて本当に良かったと思っているので、そういう仲間を北九州のあたりで、一人でも多くつくれたらいいなと思って楽しみながらやっています」

石「素晴らしいですね。Yさん継続がね、ここ数年コミットして下さって。続けるって大変なこともあると思うんですが」

Yさん「今日もその仲間と一緒に、学びを一緒にやったりとか、今データムハウスに移行になったので、メールを見て登録しきれてない方もいるので、その方たちとお昼ご飯を食べながら移行してもらったりとか、そんなことを楽しくやっています」

喜「助け合いの輪が」

石「もうちょっと一般的な話で、ご高齢の方がラインの使い方を知るだけでも孤立を防げるとか、そういうのを教え合うとか」

喜「繋がる手段がありますよっていうのを共有することでだいぶ違いますね」

石「特に今は正しい情報の共有というのが今ほど大事な時期ってないので。コロナでいろんなことがありますからね」

喜「個々が離れてしまって何の情報も正しいかわからない、そういう時、不安だよって話して、大丈夫だよっていう返事が返ってくるだけで安心するじゃないですか。そういうことが皆さんチームで出来ると、不安なことも不安じゃなくなる」

Yさん「そうですね」

石「ありがとうございました」

Yさん「ありがとうございました」

石「情報は均一といいながら、ここに来る方は関東近辺が多かったり、前に全国を勉強会で周ったことがあるんですが、甲府から遠ざかると人が少なくなっていく。九州に行くと人が少なくなるんですが、来て下さる方は熱心で意志をちゃんとしていらっしゃる方々で、Yさんは遠隔でコンスタントにやってくださって、これからそういうのが大事だと思うんですね。なかなか甲府に来れないっていう中で、遠隔で距離関係なく地道に、我々の終の住処からはじまるふとまにの住処、初めの時に言ったのはこれはすごく遠大なテーマ、社会の根本的なテーマなのでいっぺんに成就するものではなかなかない。この番組も最初数名、十名前後という事もあったんですが、でも続けるっていう。イベントやる側からすると、皆さんみたいに参加して下さるのがありがたい。スタッフもだんだん萎れてくるっていうところがあったんで、今そうやって下さる方がいてありがたいなと」

木「ありがたいです貴重な時間を」

喜「これをゼロからのスタート」

石「今日はある面新しいスタート。遠隔といたらIさん」

喜「Iさんこんにちは」

石「今何時ですか？やけに明るいですが」

Iさん「まだこちらは6時です。マンゴー農園に来てます。先週やっと収穫が終わりまして、僕が管理させてもらってるところで、先週やっと収穫が終わったんですが、1年やって2か月で全部売らないといけないので、今年は冷凍カットマンゴーで日本に出すので。うちの農園でしか作ってない5種類のマンゴーです。まあ、活動というと、僕は半径5キロ以内一人しかいないので、タイもコロナの関係で隣の町に行くのも難しい、山に行くのも難しい。山の人も怖いからこないでみたいな感じなんで。なかなか活動できてないんですが、近くにカレン族っていう人種の方が居まして、その方たちが自分たちの村だけで完結して住んでいるんですね、食べ物から着るものから何から。2年前までは道路もなかったところなので、ふとまにの住処のモデルになるんじゃないのかというところを回らせてもらっています。いろんな稲田があったり、その周りで野菜を作っていたり、自分たちの村だけで循環しているんです」

木「自給自足ですね」

Iさん「今度実況中継します」

木「是非、Iさんレポートお願いします」

石「ありがとうございました。Iさんもともと罔手會的な、英霊たちの鎮魂とか国レベルのビジョンというのもずっとやってきたんですが、インパール、作戦第二次世界大戦で最悪の作戦といわれた、白骨街道になったところの遺骨の収集とか、いろんなところに携わっていただいている、ありがたい」

喜「なかなか私たちには手が出せない内容なので」

石「Iさん以外無理だと」

喜「実働出来るというところがすごいですね」

石「あと他の方、そんな壮大な話でなくていいんですが。今日の感想でもIBさんいかがですか」

IBさん「こんばんは。先日大祓に参加させていただいて、はじめて会場参加させていただいて嬉しかったです。チャイルドアーツの時のイセヒカリを土鍋で炊いていただいたんですが、むちゃくちゃ美味しくてびっくりしました。イヤシロチ化してエネルギーが入っている土地で、ふとまにの里だから猶更だと思んですが、こんなに違うのかと思って、そういう田んぼがたくさん増えて言ったらすごいなと思いました。真菰を手に入れて、バケツで真菰を育てているんですが、ふとまにの里の真菰の苗が頂けるようになったら嬉しいなと思ってアンケートに書かせていただきました」

喜「2メートルくらいになって、今一番伸びている時で」

木「切ったらまた生えてきますからね」

喜「ものすごい勢いで」

IB「はい、ありがとうございます」

喜「大切に炊いていただいたからなおよかったと思います」

IB「ありがとうございます」

石「Tさんもいつもありがとうございます。近頃いかがですか」

Tさん「さつまいもと大豆を植えました。芽が出てきてます。でも虫の害とかいろいろあって無農薬とか難しいなと思いながら、種から芽がでてくるのが毎日楽しみで、田舎なので、そういうのは身近に育ってきたのに、本当に、土をいただいているんだというのを実感しています」

喜「再発見した感じですね」

IBさん「植物育てるのがって当たり前だと思ってたんですが、苗を植えるのと種から育てるのと違うし、害も悩ましいところです。最初ルッコラの芽が出たんですが、次の日にシカが来てしまって」

喜「若い芽はわかるんですね」

IBさん「たくさんあるのにどうして食べちゃうんだらうとか。今日はありがとうございます」

石「引き続きよろしくお願ひします。そろそろお時間で、最後ということで。久しぶりでマイクを持つ筋力が衰えて、何回か置きながら話をしてましたが、私もそんな感じなので登場したり登場しなかつたりってことありますが、我々非局在ということで繋がっている、鎮魂を通して繋がっているという自覚を持ちながら、各地域でともにやっていく。遠隔だけれども一つだよというところが大きなポイントになってきますし、これから地域に関しては喜和社長を中心に形になっているものを、皆さんのモデルとして活用をしていただければと思いますので、引き続きお願ひします」

木「最後に喜和さん」

喜「皆さんお久しぶりにお会いできて、世の中ではいろんなことが激動しているのですが、こうやって交流する時は、心温かい気持ちで一緒にお話しが出来て、本当にここで皆さんと出会えてよかったなと思っています。全国各地、このふとまにの活動を中心に一緒にご賛同をいただいて、石原さんの鎮魂も一緒にみんなで拝することが出来ながら、今日を迎えられたことを本当に嬉しく思っています。私こんなに、石原さんに会えてよかったのは初めてで、かけがえのない方なのでこれからもご無理のないように一緒に参加していただきたいと思います。これから、なかなか今、すぐお会いするのは難しいと思いますが、いろんな企画をしていきたいと思っています。是非、お会いできる際にはどんどん参加して頂いて、お会いできない時は今やっていることをみんなで共有しよう全国で広めようってことで、一緒に活動をしていただいたり、お話を聞かせて頂いたりできたら嬉しいなと思います。今日皆さん笑顔をわけていただいて、私ぐっすり眠れると思います。幸せなお時間をありがとうございました」

木「来月は8月の第1木曜日ですね。本当に非局在といいましたが、いろんなところで皆さんと繋がっていただけると思っていますので、今後ともよろしくお願ひします」

「「ありがとうございました」」